

発達障害児の行動傾向と保護者のストレスに関する研究^{1,2}

宮田 昌明* 竹内 康二**

本研究では、公立小学校の情緒障害学級（通級）に通う発達障害児の保護者を対象に、保護者のストレスを調べる質問紙と Conners 3 の 2 種類の検査を行い、保護者のストレスと子どもの行動特徴の関係を明らかにすることを目的とした。その結果、保護者のストレスととても高い相関が見られたのは子どもの多動性・衝動性という特性であり、ある程度の相関があったのは実行機能、攻撃性、友人関係であった。一方、相関が見られなかった特性は不注意と学習の問題であった。同じ ADHD の行動特徴であっても、多動性・衝動性と不注意では保護者のストレスに関連する程度は大きく異なることや、以外にも学習の問題が保護者のストレスに相関しないことについて考察した。

キーワード：発達障害、QRS, Conners 3

現在、障害児者の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援することが重要であるとされているが、その障害児を最も身近で支えているのは家族であろう（武蔵・式部, 2004）。家族は障害児支援の重要な担い手である一方で、生活の中で様々な心理的な困難や身体的負担を持つことになる。障害児をもつ家族のストレスは定型発達児を育てる家族に比べて高く、特に母親の育児ストレスは定型発達児をもつ母親よりも高い（稲浪・小椋・ロジャーズ・西, 1994）。また、広汎性発達障害児（以下 PDD 児）をもつ母親の育児ストレスは他の障害児をもつ母親と比較して高いことも指摘されている（岡野・武井・寺崎, 2012）。

PDD 児の多くは、親の側からすると養育に困難を感じる事が多く、そのストレスで母親自身が絶えず不安でいららし、親子で悪循環に陥ることが考えられる。田宮・大塚（2005）は、比較的軽度な発達障害児の母親が感じる養育困難の理由として、①アンバランスの理由がなかなかつかめないこと、②子どもとの関係がとりにくいこと、③周囲の人間から非難されやすいこと、④軽度ゆえに専門家の援助が受けにくいことの 4 つの点を挙げている。

このように、いわゆる親のストレスは子どもの発達の要因だけでなく社会的環境やサポート資源とも関係

が深いことが示唆されているが、具体的にどのような子どもの行動特徴が親のストレスに関連しているのかを詳細に検討した研究は少ない。発達障害と言っても、個々の子どもが示す行動特徴は多様であり、一概に親のストレスが高いということはできないと思われる。親のストレスの原因を子どもの障害に帰属させるのではなく、子どもの示す特定の行動特徴に求めなければ、親のストレスに対しての焦点の定まった支援を検討することができない可能性がある。

一方、子どもの行動特徴を詳細に分析するための比較的新しい質問紙として Conners3TM日本語版（以下 Conners 3 と省略する）がある。Conners・田中・坂本（2011）によると、Conners 3 は小児期から青年期の注意欠陥・多動性障害（ADHD）と、ADHD と共存する可能性の高い問題や障害を重点的かつ綿密に評価するスケールである。数種類のスケールで構成される Conners 3 では、ADHD だけでなく、実行機能、学習上の問題、攻撃性、友人／家族関係など、ADHD と関連性の高い諸問題も評価される。ADHD のほか、共存する可能性が極めて高い破壊的行動障害（素行障害 [CD] および反抗挑戦性障害 [ODD]）についても、DSM-IV-TR の診断基準に準拠したスケールが設定されている。また、問題行為の危険性項目や、ADHD と共存することの多い不安や抑うつといった内在的な問題のスクリーニング項目が設けられていることも Conners 3 の特徴である。また、Conners 3 は、本人用、教師用、保護者用と三者の記入に対応できるようになっており、保護者が記入することで親の視点で子どもの行動特徴を分析することができる。

そこで本研究では、公立小学校の特別支援学級（通級

* 明星大学人文学研究科心理学専攻

** 明星大学人文学部心理学科

¹ 本研究は科学研究費補助金（基盤研究(C), 課題番号：23531311）による助成を受けた。

² 本研究の実施やデータ処理に関しては、明星大学人文学部心理・教育学科心理学専攻の牧野泰晃さんと押金正紘さんにご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

および固定級)に通う発達障害児の保護者を対象に、保護者のストレスを調べる質問紙と Conners 3 の 2 種類の検査を行い、保護者のストレスと子どもの行動特徴の関係を検証することを目的とした。

方 法

参加者

参加者は、公立小学校の特別支援学級(通級および固定級)に通う発達障害児の保護者を対象とした。情緒障害学級(通級)に通う児童の保護者向けの研修会で研究協力を募った結果、参加の意思を示した保護者 6 名(父親 2 名, 母親 4 名)に正式に協力の依頼を行い、文書による同意を得た。以下、6 名の参加者をそれぞれ保護者 A~F として記述する。保護者 A と B は父親, 保護者 C, D, E, F は母親であった。個人情報保護のため、これ以上詳細な保護者のプロフィールの記述を避けた。

質問紙

1) Questionnaire on Resources and Stress (QRS) 簡易版

QRS は、稲浪・小椋・ロジャーズ・西(1994)が障害のある子どもを育てる親のストレスについて、多角的に測定することを目的に開発した尺度である。もともとは障害のある子どもの親を対象にして開発されているが、障害のない子どもの親との比較ができるように質問項目が工夫され、子どもの障害の有無にかかわらず親のストレスを測定できる尺度となっている。親の問題として「精神的苦痛」「悲観主義」「過保護/依存」「将来への不安」「社会的孤立」の 5 因子、家族の問題として「家族への負担」「経済問題」「家族の和合の欠如」の 3 因子、子どもの問題として「知的能力の制限」「身体能力の制限」「子どものケアの必要」の 3 因子に基づいて質問が構成されている。本研究では、子どもの行動特性と関係する親のストレスを測定することが目的なので、親の問題の 5 因子に関わる質問 25 項目(各因子について 5 項目ずつ)だけを実施した。回答は、「はい」「いいえ」「どちらでもない」「あてはまらない」の 4 つの答えから 1 つを選択してもらった。配点は、「はい」(逆スケールの場合は「いいえ」)を 2 点、「どちらでもない」を 1 点、「いいえ」を 0 点、「あてはまらない」を欠損値とした。そのため、各因子の最高得点は 10 点となる。

2) Conners 3

Conners 3 保護者用は、質問 115 項目から構成されており、過去 1 か月間の子どもの行動を検討して回答することが求められた。回答は、「0」(過去 1 ヶ月の間に

全然当てはまらなかった, 全く起こらなかった), 「1」(過去 1 ヶ月の間にほんの少し当てはまった, ときどきそうということが起こった), 「2」(過去 1 ヶ月の間によく当てはまった, そうということがしばしば起こった), 「3」(過去 1 ヶ月の間にとてもよく当てはまった, そうということがとてもしばしば起こった)の 4 つの答えから 1 つを選択してもらった。

手続き

保護者は、大学の相談室において、個別にストレスに関する質問紙 QRS 簡易版および Conners 3 に回答した。

分析方法

QRS 簡易版から得られた 5 つの尺度「精神的苦痛」「悲観主義」「過保護/依存」「将来への不安」「社会的孤立」の合計得点を保護者のストレス得点として算出した。そして、参加者 6 名において、Conners 3 によって得られた 6 種の T-スコア (IN [不注意]・HY [多動性/衝動性]・LP [学習の問題]・EF [実行機能]・AG [攻撃性]・PR [友人関係])と保護者のストレス得点の間で、ピアソンの積率相関係数を算出した。

結 果

質問紙の結果を Table 1, Conners 3 の結果を Table 2 に示した。保護者 A の保護者ストレス得点は苦悩が 6, 悲観が 4, 依存が 3, 不安が 1, 孤独が 3 で合計が 17 であり, Conners 3 による T-スコアは, IN が 58, HY が 54, LP が 42, EF が 56, AG が 73, PR が

Table 1 保護者のストレス得点の結果

参加者	苦悩	悲観	依存	不安	孤独	合計
保護者A	6	4	3	1	3	17
保護者B	5	4	1	4	3	17
保護者C	6	2	1	4	2	15
保護者D	6	5	8	3	1	23
保護者E	7	3	4	10	4	28
保護者F	5	2	2	1	2	12

Table 2 Conners 3 の各スケール*の T-スコア

参加者	IN	HY	LP	EF	AG	PR
保護者A	58	54	42	56	73	81
保護者B	70	71	65	58	90	71
保護者C	48	49	63	50	60	53
保護者D	70	71	65	58	90	71
保護者E	79	85	77	81	82	90
保護者F	83	43	88	63	49	68

*IN [不注意], HY [多動性/衝動性], LP [学習の問題], EF [実行機能], AG [攻撃性], PR [友人関係]

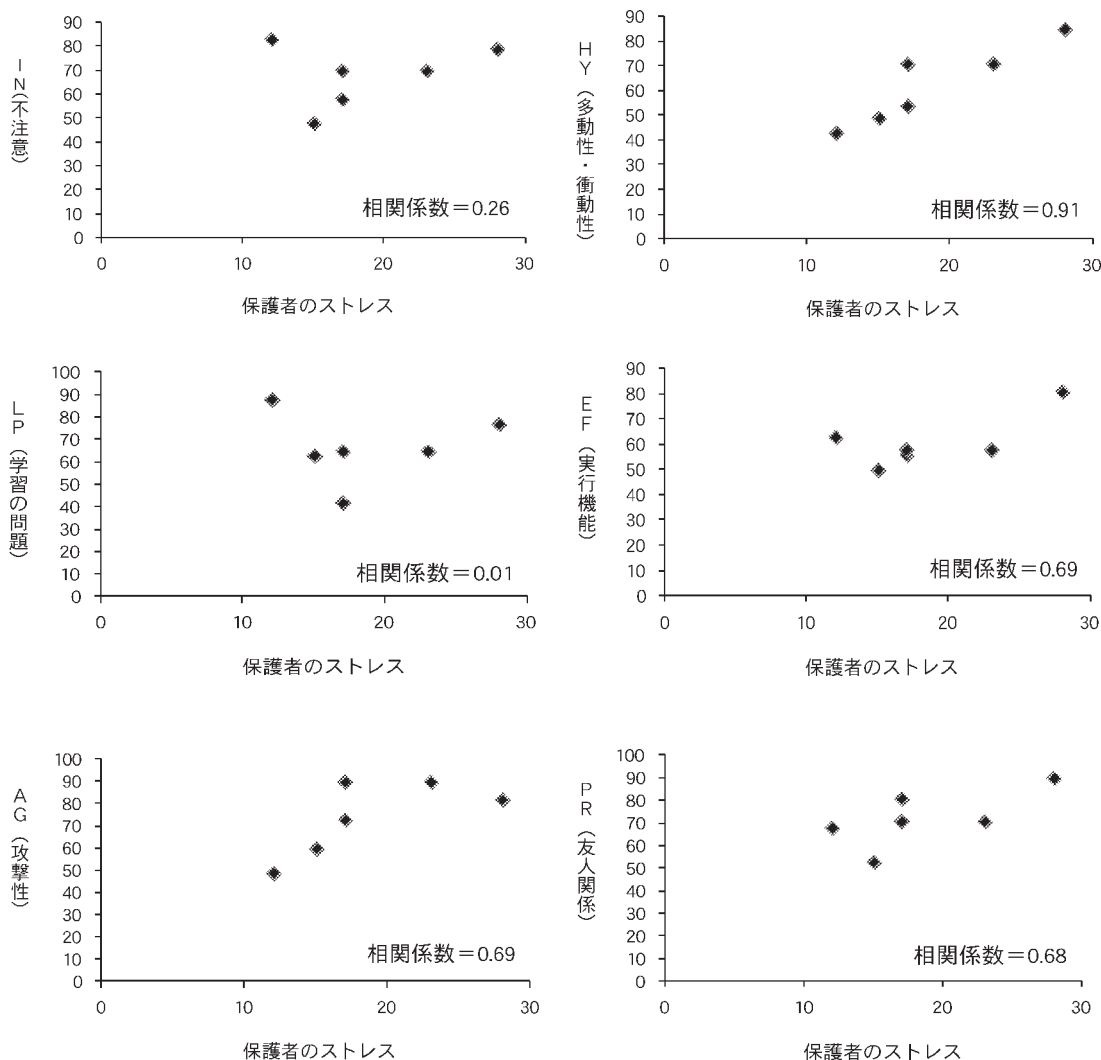


Figure 1 保護者のストレス得点と Conners 3 の各 T-スコアとの関係

81であった。保護者Bの保護者ストレス得点は苦悩が5、悲観が4、依存が1、不安が4、孤独は3で合計が17であり、Conners 3によるT-スコアは、INが70、HYが71、LPが65、EFが58、AGが90、PRが71であった。保護者Cの保護者ストレス得点は苦悩が6、悲観が2、依存が1、不安が4、孤独が2で合計が15であり、Conners 3によるT-スコアは、INが48、HYが49、LPが63、EFが50、AGが60、PRが53であった。保護者Dの保護者ストレス得点は苦悩が6、悲観が5、依存が8、不安が3、孤独は1で合計が23であり、Conners 3によるT-スコアは、INが70、HYが71、LPが65、EFが58、AGが90、PRが

71であった。保護者Eの保護者ストレス得点は苦悩が7、悲観が3、依存が4、不安が10、孤独は4で合計が28であり、Conners 3によるT-スコアは、INが79、HYが85、LPが77、EFが81、AGが82、PRが90であった。保護者Fの保護者ストレス得点は苦悩が5、悲観が2、依存が2、不安が1、孤独は2で合計が12であり、Conners 3によるT-スコアは、INが83、HYが43、LPが88、EFが63、AGが49、PRが68であった。

保護者のストレスの合計と Conners 3による各スケールのT-スコアの関係を示し (Figure 1)、また相関係数を算出した。保護者ストレス得点は、

IN (不注意) との相関係数が 0.26, HY (多動性・衝動性) との相関係数が 0.91, LP (学習の問題) との相関係数が 0.01, EF (実行機能) との相関係数が 0.69, AG (攻撃性) との相関係数が 0.69, PR (友人関係) との相関係数が 0.67 であった。

考 察

本研究では、公立小学校の情緒障害学級 (通級) に通う発達障害児の保護者を対象に、保護者のストレスを調べる質問紙と Conners 3 の 2 種類の検査を行い、保護者のストレスと子どもの行動特徴の関係を明らかにすることを目的とした。その結果、保護者のストレスととても高い相関が見られたのは子どもの多動性・衝動性という特性であり、ある程度の相関があったのは実行機能、攻撃性、友人関係であった。一方、相関が見られなかった特性は不注意と学習の問題であった。

結果からは、保護者のストレスと子どもの多動性・衝動性に相関があるということが分かっただけで、因果関係まで明らかになったわけではないが、子どもの多動性・衝動性が保護者ストレスを高めた可能性や、逆に保護者ストレスが子どもの多動性・衝動性を高めた可能性が示唆される。もし、子どもの多動性・衝動性が保護者ストレスを高めたとするなら、保護者のストレスは子どもの行動の質的な面よりも量的な面に影響されることを示しているのかもしれない。例えば、少ない頻度で起きる深刻な問題 (暴力など) よりも多くの頻度で起きる比較的深刻さの低い問題 (口ごたえや指示に従わないことなど) の方が保護者のストレスに強く影響するということである。このことは、攻撃性よりも多動性・衝動性の方がストレスと相関が高かったという結果からも支持される。一般的に多動性・衝動性に由来する問題行動は、保護者が子どもから目を離せない状況や繰り返す子どもを注意・叱責したり指示したりする状況を作りやすいと考えられる。こうした状況下では、保護者は落ち着く間がないとか家事や仕事ができないといったことが起きやすくなり、保護者のストレスが高く評価されたとしても不思議ではない。また、何らかの原因で高まった保護者のストレスによって子どもに対する保護者の行動が不安定になったり攻撃的になったりした結果、子どもの多動性・衝動性が高まった可能性を考えることもできる。

保護者のストレスとある程度の相関が見られた実行機能、攻撃性、友人関係については次のように考えることができるかもしれない。実行機能の問題は、日常生活での宿題、家事、整理整頓といった保護者との関

わりが深い活動において、スムーズな遂行を困難にする可能性があるだろう。つまり、日常生活における様々な活動において取りかかりが遅く、失敗が多く、途中で投げ出してしまうことを介してストレスに影響しているという可能性である。攻撃性については保護者が被害にあったり、見たり、報告を聞いたりしただけでもストレスに影響するのは一般的なことであろう。友人関係については、単に子どもの社会的環境に対する心配があるだけでなく、友人関係の問題がコミュニケーション能力の低さを背景としている場合、保護者とのコミュニケーションが円滑に進まないことが多くあることが推察される。コミュニケーションが円滑でないことはストレスに影響する要因として一般的に認められている。また、逆に保護者のストレスが高まった影響で実行機能、攻撃性、友人関係に問題があると評価された可能性があることは前述したとおりである。

保護者のストレスと相関が見られなかったものは、不注意と学習の問題であった。多動性・衝動性と同じ ADHD の行動特徴でありながら、不注意はストレスとの相関がまったく見られなかったことが興味深い。不注意は集団活動では問題視されることの多い行動特徴であるが、一対一の関わりが多い家庭では特に問題視されることが考えられる。簡単に言うと、保護者の手を煩わせることが少ない特徴と言えよう。対して、学習の問題が保護者のストレスと相関が無かったことは、素朴な直観とはずれている。世間一般の多くの保護者は子どもの成績に関心を持っているように見えるからである。しかし、本研究の結果はそうした素朴な直観とは異なるものであった。考える可能性としては、本研究の参加者の子どもは特別支援教育を受けている発達障害児なので保護者は学習面での成果よりも生活面や問題行動といったことに重きを置いて子育てをしているということである。つまり、学習の問題が保護者のストレスに影響するかどうかは、その保護者の子育てにおける目的や価値観といった家庭の文脈によって大きく異なるのかもしれない。

今後の課題として、さらにデータを蓄積し、相関関係だけでなく保護者のストレスに影響する子どもの行動特徴について因果関係の検討をする必要があるだろう。また、そうした分析からストレスの原因別に子育てを支援する方法を提案する必要があるだろう。

引用文献

Conners, C. K. (原著)・田中康夫 (監訳)・坂本 律 (訳) (2011). Conners 3™ 日本語版マニュアル

- 金子書房.
- 稲浪正充・小椋たみ子・Rodgers, C・西 信高 (1994). 障害児を育てる親のストレスについて特殊教育研究, **32**(2), 11-21.
- 武藤博文・武部恭子 (2004). 障害児のためのサポートブック支援教室の試み 富山大学教育学部紀要, **59**, 21-32.
- 岡野維新・武井裕子・寺崎正治 (2012). 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親の母親に対するサポート 川崎医療福祉学会誌, **21**(2), 218-224.
- 田宮 縁・大塚 玲 (2005). 軽度発達障害児の就学にむけての保護者への支援—S大学教育学部附属幼稚園の実践を通して— 保育学研究, **43**(2), 109-118.

Relationship between Parental Stress and Behavioral Tendency of Children with Disabilities

MASAAKI MIYATA (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) AND KOJI TAKEUCHI (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2013, 31, 29-33

Key Words : Developmental Disabilities, QRS, Conners 3